特集

3·11を文京学院は忘れない！

文京学院としての3・11総括

昨年3月11日に東北を揺るがせた東日本大震災から1年が経ちました。震災直後から被災地へ様々な支援を行ってきた文京学院は、1万6千人近い方々が亡くなり、今なお3千人を超える方々が行方不明である現状と、故郷へ帰れない多くの方々の思いを、決して忘れてはならないと考えています。これまで文京学院が行ってきた活動を検証し、被災地支援を継続するべく、3月15日、以下の方々が座談会で報告し合いました。

ふじみ野キャンパス

★笹岡眞弓・人間学部人間福祉学科教授（社団法人日本医療社会事業協会前会長）★中山智晴・人間学部コミュニケーション社会学科教授（環境教育研究センター長）★森村幸夫キャンパスディレクター★齋藤千尋さん（人間学部人間福祉学科3年）★細谷貴史さん（同コミュニケーション社会学科2年）

駒込キャンパス

★北野啓子・高校副教頭（キャリア教育推進部長）★丸山潤・事務センターグループマネジャー★赤間澪・高校バレーボール部主将（2年檜組）★望月あすか・同副将2年檜組）

本郷キャンパス

★喜多見康・経営学部／大学院経営学研究科教授（コンテンツ多言語知財化センター長）★竹内秀和キャンパスディレクター★高木哲平さん（経営学部コンテンツ・マーケティング専攻、喜多見ゼミ2年）

1044人が被災地支援

——各活動詳細を。

笹岡眞弓教授

笹岡　東日本大震災直後の3月17日に宮城県庁と石巻市、亘理町、4月には岩手県遠野市、大槌町、釜石市に入りました。仙台市若林区では、チーム医療を行っている組織の一員として活動しました。石巻では市の要請を受けて、福祉避難所のコーディネートを行い、寝袋持参で石巻赤十字病院に泊まり込み、現地の状況把握をしました。

言葉を絶する現状を、福祉を学ぶ学生も知るべきだと考え、9月1日から3日まで学生40人を遠野市で被災地支援を行っている社会福祉協議会「遠野まごころネット」へ連れて行きましたが、あいにく台風で作業ができませんでした。2日間、現地の方のバスに乗って被災地の様子を見せていただき、帰京後、本学で報告会をしました。

学生たちは気持ちが不完全燃焼のままでしたので、今年2月・3月に改めて石巻市の現地調査活動に連れて行きました。また、「遠野まごころネット」の協力で、3月1日に到着した「新・文明の旅」プログラム被災地支援ボランティア班（以下「ボランティア班」）と共に活動しました。

齋藤　今年2月、石巻市で被災された在宅避難世帯を一軒一軒回り、生活状況や健康状態を聴き取る調査をして、必要な場合は専門職に引き継ぐという活動を行いました。事前に、石巻医療圏健康・生活復興協議会による研修やロールプレイ、ディスカッションを繰り返して研鑽を積みました。実際の活動は、早朝から二人一組で在宅避難世帯を訪問してお話を伺いました。

中山智晴教授

中山　東日本大震災後、環境教育研究センターの学生たちが地元NPOと連絡を取り合う中で、被災地ではランドセルが足りないことが判明し、「ランドセル大作戦」を展開。学生たちはふじみ野市内の全11小学校に声掛けし、1024個のランドセルを集めて、ふじみ野キャンパスの学生たちに被災地へのメッセージを依頼。それをランドセルに詰めて、現地へ運びました。輸送の際も、地域の運送屋さん始め沢山の方々が協力してくださいました。その時に学生が立ち上げた「ボランティアふじみ野」が、ふじみ野市の被災地ボランティア活動の核となって育っています。

細谷　初めて被災地へ行ったのは5月で、岩手県大船渡市で瓦礫撤去作業や個人宅の掃除などの他、炊き出しの手伝いをしました。7月と10月も同様の作業で岩手県陸前高田市へ行きました。環境教育研究センターでは普段、福島県郡山市逢瀬町の方々と交流し、衰退しつつある農業の再生の手伝いをしています。地震による原子力発電所事故で風評被害が広がり、野菜が売れないということを聞き、上福岡駅前の商店街と連携して空き店舗をお借りし、出荷制限値をクリアした野菜の代行販売にも取り組んでいます。

その他、ふじみ野市やNPO法人が僕たちに発表の機会を与えてくださり、逢瀬町の農家の方々とのシンポジウムなども企画させていただきました。3月には、「ボランティア班」と一緒に遠野市へ行きました。

森村　私は昨年6月に職員有志と「遠野まごころネット」のもとで、民家のヘドロ除去・瓦礫撤去・支援物資の仕分け作業などを行いました。大槌町・陸前高田市で行った平成23年度の本学のボランティア件数は20件で、延べ人数は1044人です。この人数は福祉大学に劣らず、関東近辺の大学でもトップクラスではないかと思います。

喜多見康教授

喜多見　私はコンピュータ・グラフィックスが専門で、子どもたちに向けたワークショップを個人的に10年ほど行っています。東日本大震災後、私に出来るのは、やはりその技術をもって子どもたちに喜んでもらうことだと思い、ソフトウエアやハードウエアのメーカーの協力者に声掛けし、支援活動準備をしてきました。福島県双葉町民と役場機能全てが避難移転している埼玉県加須市の旧県立騎西高校で、昨年8月にワークショップを行いました。

高木　コンテンツ多言語知財化センターの「ブレーメンズ」という学生集団に所属して、デザインしたものを商品化して販売し、その売上げ全額を被災地に寄付する活動を行っています。実際に大学祭や群馬県富士見町での産業祭、文京区のシビックセンターで開かれた文京博覧会でグッズを販売しました。3月22日から東京ビッグサイトで開かれる東京国際アニメフェア（TAF）でも販売予定です。「ボランティア班」からブレーメンズに声掛けいただき、遠野市へ行きました。

竹内秀和キャンパスディレクター

竹内　遠野市では「ボランティア班」8人、中山ゼミ4人、ブレーメンズ3人、慶應義塾高等学校の男子生徒1人、教職員6人で、3月1日から4日の日程でお寺の清掃やお墓の雪かきなどを行いました。島田昌和先生、笹岡先生も一緒に活動されました。「新・文明の旅」プログラム海外派遣学生（以下「海外派遣班」）が訪問中のトルコのアンカラ大学に向けて、各チームがスカイプで遠野市の現状や自分たちの活動などについて伝えるため、学生たちは「遠野まごころネット」の設立者や隊長にも取材させていただきました。前夜、寝る間を惜しんで現地の学生に何を伝えるか、熱心に議論をして準備しましたが、このころには素晴らしいチームワークが出来上がっていました。

また、吹奏楽部が石巻専修大学で行われた東北支援プロジェクトに参加し、力強い演奏を披露しました。

北野　中高では東日本大震災後、生徒会役員がすぐに義援金募金活動を開始しました。5月に、東北学院大学と交流を持つ本校英語科の成田豊教諭を通じて辞書が足りないことが判明し、高3を中心に辞書の寄付を呼びかけて現地へ送りました。

さらに、学校全体で出来ることはないかと模索し、陸前高田市で被災され、大船渡高校から本校へ転入した生徒のお父様・佐藤さんにご相談しました。現地の状況をよくお分かりの上、2004年に起こったインドネシアでの津波後に感染症が広がったことを危惧されていて、「殺菌マスクが良い」というアドバイスをくださいました。全校に募金を呼び掛けたところ、140万円を超える金額が集まりました。法人事務局の協力もあり、ハエ取りリボンも購入して昨年7月に佐藤さんと私とで被災地へ届けました。マスクの袋には、生徒たちが被災地の方の気持ちを一生懸命考えて、メッセージを書きました。

丸山　殺菌マスク7200枚、ハエ取りリボン5600個をお贈りしました。当時はそれらの必要性が高まったことで入手困難でしたが、皆さんのお気持ちを無駄にしてはいけないと、多くの方々の協力を得て入手できました。

高校バレーボール部の吉田岳史監督は、保護者やバレーボール部OGからいただいた義援金を、親善試合の下見を兼ねて現地へ持参しました。

赤間澪さん

丸山潤マネジャー

赤間・望月　私たちバレーボール部は、昨年9月17日から19日にかけて陸前高田市の高田高校と大船渡市の大船渡高校との親善試合を行いました。バレーボール部OGが中心となって企画したチャリティTシャツの売上金を義援金として寄付させていただき、親善試合時にはそのTシャツを全員で着用し、心をひとつにして交流しました。

丸山　中学・高校では、被災地にどのような支援が出来るか考えると共に、震災後、防災体制を見直す組織を立ち上げ、その中で東日本大震災を教訓としていざという時に「いかに生徒を守るか」の課題にも並行して取り組んできました。

家の中のヘドロ除去でやっと住める状態に

様々な課題に「学生力」でチャレンジ

——現地で感じたことを。

笹岡　岩手県では8月30日に、宮城県では9月30日に避難所が閉じられました。高齢や障害を抱えた方々、要介護の方々が福祉避難所から仮設住宅に移られた場合はフォローが可能ですが、被災した自宅での在宅避難者数は1万とも2万とも言われ、自治体はその実数を把握していませんので、その方々の暮らしを知る調査の必要がありました。それには多くの人手がいり、それまでは専門職以外は携われない分野でしたが、9月以降は私が主に活動する石巻市で、学生の力を借りて一軒ずつ訪問する作業を行いました。

石巻医療圏健康・生活復興協議会としても、実態調査で学生の支援を受けるのは初めての経験で、文京学院生のひた向きさや素直さなどを評価していただき、学生パワーを感じました。

齋藤　実際にご自宅を回ってみると、仮設住宅に住んでいないために支援物資の支給がないことへの不満・不安もあり、皆さんの辛さを身を持って感じました。中には近所とのコミュニケーション不足により、孤立感を抱えて生活する方もいらっしゃいました。この調査で初めて判ることも多々あり、社会福祉分野を目指す私としては深く考えさせられました。

中山　震災後3週間目あたりから学生たちは被災地に入りましたが、現地で遺体の状態の凄まじさなどを聞き、学生は耐えられるのかということを心配しました。一方では放射能の問題もあり、学生に計測装置を持たせたり、放射能の専門家を招いて講演会でお話を伺ったりしました。最初の1カ月は、学生に万が一のことが起きた時の責任の取り方を考え、とても歯痒い思いをしました。

学生たちは、修学旅行に行けなくなった福島県南相馬市の中学生たちのために、彼らと一緒に渋谷で義援金募金活動をしました。家族を亡くした生徒の気持ちを思い、その話題には触れないように気遣いましたが、逆に彼らから学生の家族に関する質問があり、中学生の強さを感じました。

また、学生にどうにかして感謝の気持ちを伝えようとする彼らの姿に、学生はジレンマを抱えながら成長させていただいていると思います。

細谷貴史さん

細谷　何度も大船渡市に通って、お年寄り家庭の掃除などをするたびに人との繋がりができ、大船渡市にとても愛着を感じました。「ボランティア班」の一員として遠野市へ行き、これまで自分がやってきたことを振り返りました。確かに被災された方々のためになっていたかも知れませんが、周囲から褒められるたびに天狗になっていた自分に気づき、これまでは単なる自己満足のためで、中身が薄っぺらだったように思いました。これからは中身のある支援をしていきたいと感じました。

森村　現段階では、53人ほどボランティア希望者がいてお断りしている状況ですが、年数が経つにつれて希望者が激減しないように対策を練る必要があると感じています。

喜多見　私がワークショップを開いた時点で、双葉町の方々はもう半年近く加須市にいらしたわけで、いつ終息するか判らない状況で全く違う環境に順応し、自分たちなりにコミュニティを作り、仲良く生きて行こうとしている姿に感銘を受けました。当初ワークショップは子ども対象でしたが、大人からも「参加したい」という要望があり、年代を超えたワークショップとなりました。「物を創って自分が満足する」ということは人間の喜びの機能ですから、それを感じていただけたならばうれしいです。

高木　遠野市では、ボランティアの手が足りていないと感じました。今回、神奈川大学の学生たちも来たのですが、彼らは常にボランティアを絶やすことなく継続出来るシステムを作っていますので、本学にもそういう体制がほしいです。

竹内　別々の活動をしている学生たちが学部・学科を超えてひとつのことに打ち込むと、お互いに切磋琢磨するので、「学生力」が一気にアップすることを目の当たりにしました。

「ボランティア班」が帰京後、「海外派遣班」は丁度ブルガリアのソフィア大学とヴェリコ・タルノヴォ大学を訪問中でしたので、そちらへもスカイプでボランティア報告をしました。現地の反応はかなり大きくて質問が絶えず、「一緒にボランティアに参加したい」という言葉も引き出せたのは、文京学院生の「学生力」によるものだと思います。

北野啓子副教頭

北野　中学・高校単位で被災地支援をする限りは、生徒に何かを学んでほしい、私たち教員も学びたいという気持ちがあり、現地の学校と繋がって継続的な支援を出来ればと考えていたのですが、日本全国からの支援がある状況で、それはなかなか難しいと感じました。大船渡高校の校長先生も、「沢山の支援をいただいて物資は豊富にある。むしろ今後は、生徒たちがその状況が当たり前だと思って慣れないように、私たち教員が気を付けなければならない」とおっしゃっていたことが印象的でした。

赤間　高1の時に、陸前高田市でバレーボール部の合宿をしました。7万本の松原の間を走り、地元スーパーで買い物もしましたが、昨年の親善試合の時には松が1本残るのみで、町が跡形もなく消え去った様子に、本当にショックを受けました。今年の1月に、私たちが春高バレーに出場した際、高田高校から横断幕をいただき、私たちが一生懸命バレーボールを頑張ることが、被災地の方々への励みになると思いました。

望月あすかさん

望月　ニュースの映像で津波の高さや瓦礫の山を想像していましたが、実際に現地に残る津波の跡を見て、その高さに茫然として声も出ませんでした。被災した高校生たちは、そのような状況でも負けずに明るく生きていて、私たちのほうが励まされました。何も出来ないことに無力さを感じましたが、バレーボールを一生懸命やる姿を見ていただくことが、今の自分がやるべきことだと実感しました。

丸山　関東地方も、いつどのような災害が起きるか判らない現在、学校は地域において中心的な役割を担うことになると思います。今後、万が一の場合、被災地支援だけではなく人との関わりを結んできた経験を持って、本校は地域に貢献する道も併せて考えていかなければならないと考えています。その意味で、復興支援を続けることは、私たち自身も災害を乗り越える方法を学ぶことに繋がっていると考えています。

ブレーメンズによる支援グッズ

1024 個のランドセルに願いを込めて

中高大連携支援活動も視野に

——今後の課題や抱負を。

笹岡　個人として、属している団体のひとりとして、文京学院の教員として活動してきましたが、これらがきっかけとなって次の活動が生まれるという循環作用があると思います。これからもいかに学生たちを被災地に送り続けることが出来るかが、私自身の課題です。

今日をひとつの契機として、「被災地を忘れない」「次に繋げていく」という循環を学生たちに語り継ぐこと、「地球はひとつ」という意味合いの学会を、文京学院で開くことが抱負です。

齋藤千尋さん

齋藤　実際に被災地でお聞きした生の声を、周囲に伝えていく大切さを感じました。学会やシンポジウムなどにも積極的参加して、活動を今回のみで終わらせず、決着がつくまで、被災地と継続的に関わっていきたいと思います。

中山　皆さんの話を聞いて、学生の本能を信じて良かったとしみじみ感じています。これからもずっと被災地と関わり続ける中で、学生だけではなく中高生や専門家などが力を合せて、農業や食の安全性・子育てなど広い範囲での支援をする必要性があり、色々な繋がり方が出来るのではないかと思い、それを今後の課題として考えていきます。

高木哲平さん

北野　大学で様々な取り組みをなさっていることを知りました。中高生を現地に送ることは現状では難しいため、こちらに居ても中高生に出来ることがありましたら、お手伝いさせていただけるとありがたいです。

喜多見　中高生が描いたイラストを、ブレーメンズがデザインして商品化し、販売することもできます。

笹岡　ふじみ野には地域連携センターBICSがありますので、中高生にも出来ることは沢山あります。

齋藤　私はそこに所属して、地域の方々と共に活動していますが、その中にはこちらへ避難された方々の交流会支援もあります。

高木　TAFでは、「新・文明の旅」プログラムを通じて本学と交流がある在日ブルガリア共和国大使館がブースを設け、ブレーメンズとコラボレーションで被災地でのボランティア活動を報告することになっています。そういうブースのサポートも良いですね。

中山　若い人たちの考え方はやはり素晴らしい！　バレーボール部の二人も「バレーしか出来ない」のではなく、「バレーがあるから提供する」という本能で活動していると思います。

竹内　「ボランティア班」の中に高校生がひとりいたのですが、スカイプで海外に情報発信する際、内容をとてもコンパクトに解り易く話せることに感心しました。また、発想が斬新なので、大学生からはそれを加工してデザインしていこうという意見もありました。

今後も、被災地支援活動を継続させるためには、学生が主体的に企画し、実行することだと感じました。

細谷　これからは、被災地の写真展などを開き、まだまだ手助けが必要な現状を周囲に訴えて、共感してくれた人たちと一緒に行動したいと考えています。初めてボランティアをする人には、気負い過ぎて疲れてしまわないように配慮していきます。3・11を風化させないように周囲に活動を広めることが抱負です。

喜多見　3月24日に宮城県の七ヶ浜国際村で開催される「こどもコ・フェスタin東北」で、ゼミ生と一緒にやっとアニメ制作のワークショップを実施出来ることになりました。東北6県の子どもたち400人を招き、創造の楽しさを体感してもらいます。大切な学生たちが、このイベントを通じて被災地の現状を知り、生きることの意味を考えて、自分と周囲を守れる人間になってほしいと願います。

森村　一度に50人以上の学生が集まると、ボランティア活動に関する思いにもバラツキが生じます。今後は事前説明会などで全体の意識を高めてから送り出したいと考えています。これまでの活動に参加した者は、学生だけではなく、私たち教職員もまた大きな変化を感じます。それが今後の勉学や仕事に生きることは間違いありません。特に福祉系・心理系分野を目指す学生にとっては学ぶべき点や自分への課題が見えたのではないかと思います。

北野　3月11日に交通網が途絶える中、15時半には佐藤芳孝校長が生徒を学校に泊めることも想定して、私たちは買い出しに走りました。その経験を基に、丸山マネジャーを含めて近隣の学校に出向き、防災対策の研究をして、備蓄を整えています。

丸山　各ご家庭から生徒分の非常食の費用をいただき、さらに東京都私学財団からの支援などを有効活用し、毛布・ランタン・シートトイレなどを購入しました。卒業記念品もソーラーライトです。今私たちは「万が一の場合、いかに安全に生徒を学校に預かるか」という研究を進めています。少なくとも3日間は生活出来る体制にかなり近づいていますので、ご安心いただければ幸いです。

中山　3月11日、ふじみ野キャンパスは修了証書授与式の予行演習中だったのです。環境教育研究センターでは、ふじみ野市内の田んぼで無農薬の米作りをしていますので、常時数百kgの米を備蓄しています。畑では冬野菜を作っていますので、食糧には困りませんでした。

一同　すごい！

赤間　春休みに高田高校も合宿にいらしてくださるので、再会を楽しみにしています。その時までに、今自分が出来ることを見つけたいと思います。

望月　高田高校、大船渡高校のバレーボール部員の皆さんが「来てくれて本当にありがとう！」と言ってくれました。やはり、私たちはバレーボールを通して被災地の方々と繋がりを持っていきたいと思います。

森村幸夫キャンパスディレクター

森村　現在は被災地の方々のニーズが多様化していますので、本学では、被災地支援活動を今後も継続してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

㊤中高に備蓄されている非常食・備蓄品の一部（右下）生徒が管理する個人分